

原子力被災者等との健康についてのコミュニケーションにかかる
有識者懇談会第3回(中央合同庁舎第5号館24階省議室)

2012.8.9 16:30-18:30

コミュニケーションの目的について

中谷内 一也
同志社大学

コミュニケーションの目的を何に置くべきか？

→ 少なくとも、「安心」を目的とすべきではない

なぜか？

→ 健康への取組みや情報提供を抑制すること
になるから

安心の2つのかたち

(1)意識していたリスクから逃れたとき

ex. 体調不良＋要精密検査 → 不安



精密検査の結果異常なし → 安心

(2)そもそもリスクを意識していない

ex. おいしくごはんをいただけるのは、
カドミウムやヒ素を意識しないから

「(1)意識していたリスクから逃れたとき」のプロセスを、慎重に進めると別の不安が生まれる

甲状腺スクリーニング検査 (前回懇談会鈴木先生ご報告)

A判定(A1): 結節や嚢胞を認めない 64.2%

(A2): $\leq 50\text{mm}$ の結節、 $\leq 20\text{mm}$ の嚢胞 35.3%

A2判定は慎重に進めるからこそ不安を導く
しかも、次回検査まで2年間は何もしない

A2判定を伝えることは意義がある
～自分の身体状況を自分が知る
長期的にとともにリスクに向き合う

「(2)そもそもリスクを意識していない」について

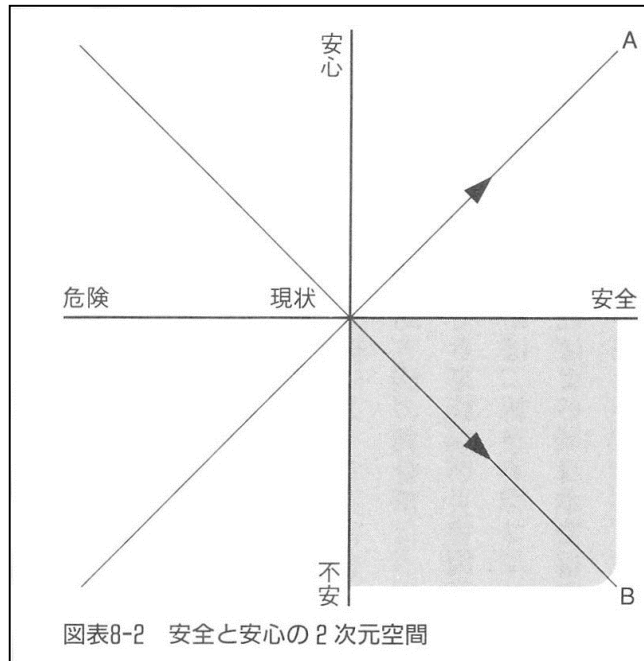
- ・特定リスクを意識することは不安を招く

→ Out of sight, out of mind 効果

しかし、意識させないようにと、政府が健康への取り組みや放射線リスクの情報提供を控えるのは論外

- ・意識しないことは福島現状を考えるとあり得ない

→(第1回懇談会高村委員ご発言)「私たちは鈍感になろうとしているのです」につけ込んではいけない



現状で安心を目的とすると、

- ・健康への丁寧な取組み
- ・リスク情報提供

を意図的に抑制することになる

拙著「リスクのモノサシ(NHK出版)」p.239

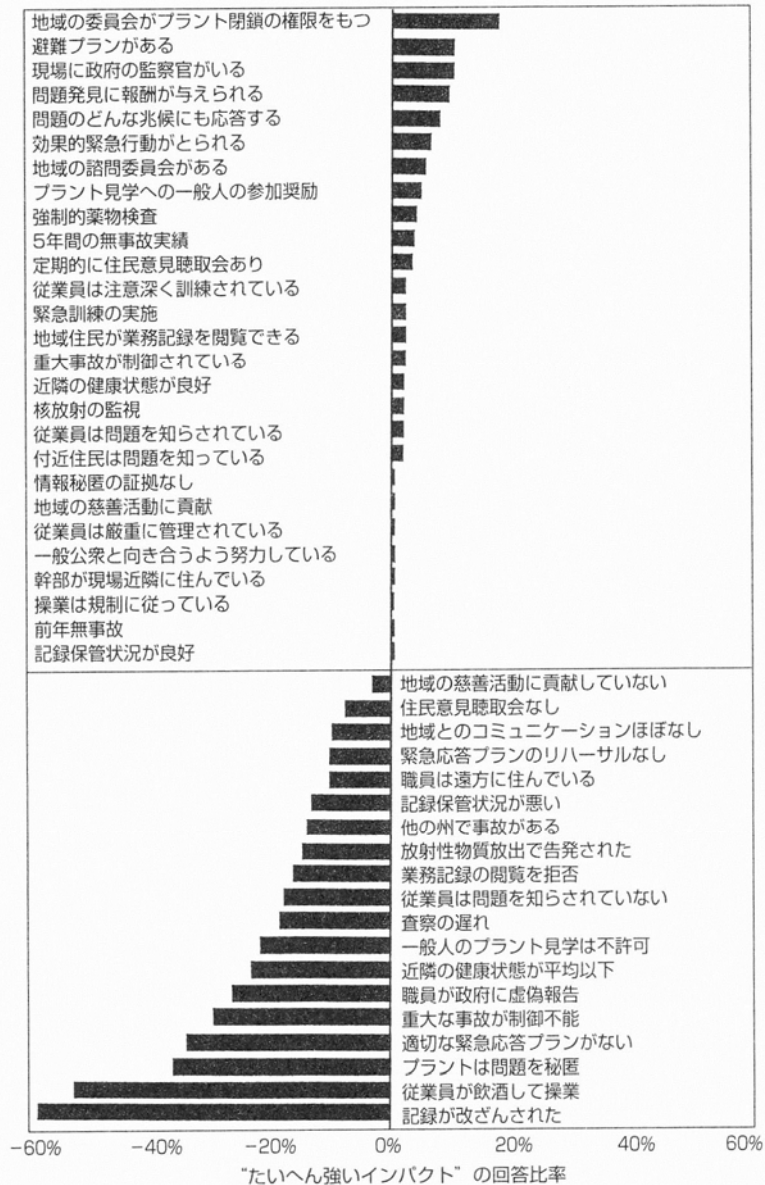


図31 さまざまなできごとの信頼へのインパクト (スロビック, 1997より)

不適切な情報提供のありがた (改ざん、秘匿)は、リスク管理への信頼を崩す

拙著「環境リスク心理学(ナカニシヤ出版)」p.152

- ・政府・専門家は健康問題に関して住民と長くつき合うことになる。回り道の余地がある
- ・短期的には住民の不安を高めることになっても、長期的な安全への取り組みの中で信頼が高まり、結果として不安が低まればよい

～リスク管理への信頼と安心／不安には強い相関

(中谷内一也 2011 リスク管理への信頼と不安との関係 心理学研究, 82, 467-472.)

では、コミュニケーションの目的を何に置くべきか

- ・安心ではなく安全
- ・長期的な信頼関係の醸成

それらに加えて求められるのが;

- ・コミュニケーションが簡便に行えること

(前回懇談会島田委員ご報告)

- ・先述のように、鈍感になろうとすることにつけ込んでコミュニケーションに消極的になるべきでない
- ・一方で、強制的にリスク情報を流し込むわけにはいかない

好ましいコミュニケーションサポートは？

住民の知りたいことはバックグラウンドによって大きく異なる(第1回懇談会坪倉委員ご報告)

→コミュニケーションのサポートも容易ではない
しかし、ある程度のまとまりは示唆される

情報ニーズが多様であることを踏まえ、住民個人が簡便にコミュニケーションできる体制を実現できないか

提案

情報アクセスのためのインテイク窓口

- ・ここでいうインテイクは、総合案内みたいなもので、住民はワンクッションで必要な情報にアクセス
- ・インテイカーは、特定領域の専門家ではなくて、住民情報ニーズの専門家